

「修道院と霊性」の歴史と思想

——カトリック教会とギリシャ正教会——

黒川知文

序

現在の霊性(スピリチュアリティ)に関する宗教学会における研究動向は、大きく二つに分類される¹。ニューエイジや心霊主義、オカルトなどのサブカルチャーに起因する社会現象としての霊性を扱う場合と、医療におけるターミナルケアなどの場面で個人の内面において生起する超越的志向としての霊性を扱う場合である。いずれにせよ、霊性研究は学問的には緒についたばかりであり、未だ不安定な状況にあるといえる。ところで、霊性とは、本来キリスト教の修道思想と歴史の中において現れたものである。修道院はどのように発展し、そこにおいて霊性はいかなる形で保たれてきたのであろうか。修道院の歴史と思想を検討してキリスト教の霊性を考察し、それをユダヤ教やイスラームの霊性と比較する。さらに、仏教や、ヒンズー教等とも比較していく。この作業により、霊性の本質が解明されると考えられる。

本稿の目的は、西洋における修道院の歴史と思想を概観することにより、

霊性を考察することにある。具体的には、カトリック教会とギリシャ正教会の修道院の歴史と思想に焦点を当てる。その際、詳細な史料分析に基づく歴史研究ではなく、歴史を巨視的に見て本質を考察する歴史研究の方法を採用する²。

I. 修道院の起源

修道院に類似した信者の共同体としては、古くは旧約時代の「預言者のともがら」³や、中間時代におけるエッセネ派、クムラン教団、テラペウタイ⁴等があげられる。

すでに西方教父として、キリスト教とギリシャ哲学との調和を求めたユスティノス(100-165年)、キリスト教信仰は合理性を越えるとしたテルトゥリアヌス(160-220年)、聖書の統一性と使徒の権威を強調したエイレナイオス(2世紀中頃-200年)、他方、東方教父としては、ニュッサのグレゴリ

² 本稿においては以下を基本文献として使用した。朝倉文市『修道院にみるヨーロッパ』(山川出版社、2002年)、イバニエス.P.『恵みを貫くもの』(ドン・ボスコ社、995年)、荻野弘之『神秘の前に立つ人間—キリスト教東方の霊性を拓く』(新世社、2005年)、高橋保行『聖なるものの息吹—正教の修道・巡礼・聖性—』(教文館、2004年)、豊田浩志編『キリスト教修道制—周縁性と社会性の狭間で—』(上智大学、2003年)、フランク.K.S『修道院の歴史』(教文館、2002年)、山形孝夫『砂漠の修道院』(平凡社、2001年)、マーセル.G.『キリスト教のスピリチュアリティ』(新教出版社、2006年)。

³ エリシャの時代に、ベテルとエリコにおいて複数の預言者が集団で生活していたと推定される。『II列王記』2章を参照。

⁴ K.S.フランクは、テラペウタイについて「紀元後1世紀のアレクサンドリアに生きたユダヤ人フィロンは、人里はなれたところで共同生活を送ったユダヤ人たち、すなわち、禁欲的な放棄を自らに課し、観想を生活の目標にした人々」と定義している。フランクは、キリスト教修道性の起源を①新約聖書の解釈②ユダヤ教における禁欲③ヘレニズム哲学の禁欲④古代の異教的禁欲の4点にあると述べ「キリスト教禁欲を成立させた決定的要因は、福音が最初に向かっていた世界が、禁欲的生活を既に知っていた世界であり、禁欲にとって都合な環境が保たれる世界だった」と結論する。フランク、前掲書、16頁。

¹ スピリチュアリティの最近の研究動向に関しては、さしあたり以下を参照。伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』(溪水社、2003年)、湯浅泰雄監修『スピリチュアリティの現在』(人文書院、2005年)

ウス（330–394年）、エジプトのマカリウス（300–390年）に、修道思想の萌芽が見られる。マカリウスは、ナイル河口西部の砂漠で修道士の共同体を建設した。

修道院の起源は、3世紀のエジプトにおける隠修士にあると考えられる。

アントニウス（251–356年）は、ナイル河畔の砂漠で禁欲的修行を行い、「修道者の父」と称せられた。彼は、マタイ6章34節の「明日のことを思いわずらうな」の言葉に従って財産を売り払って、修行に励んだ⁵。隠修士とは、人が住まない地で孤独と静寂の中で禁欲的生活を送るキリスト者のことでありアントニウスはそれにあたる。また、隠修士による孤独な修行を隠修制と呼ぶ。共住型は、共同生活によるものである。パコーミオス（290-346年）は、テーベで修道生活を送り「貞潔・清貧・従順」の修道規則を作成した。彼は、労働を重視し、共住型修道院を起し、それは、後の修道制の主流になった⁶。アウグスチヌス（354–430年）も修道生活の思想を説いた⁷。

バシレイオス（330–379年）は、修道院付属施設を建設して、「東方修道者の父」と称せられる。バシレイオスは、アントニウスの隠修制を踏まえて、パコーミオスの共住型修道制を確立した。バシレイオスは、「神は人間を孤独な野性的存在として創造したのではなく、穏和な仲間の存在として創造した」⁸と考えて、共住型を推進した。

II. 中世前期の修道院

中世において修道院は大きく発展していく⁹。

⁵ 砂漠と居住地域の境あたりで隠者的生活を行ってきた或る禁欲者に合流したことから、隠者的生活様式であった。フランク『修道院の歴史』、35頁

⁶ 「共同の修道院生活の創造はエジプト人パコミウスの名と結びつけられている」同、37頁

⁷ アウグスチヌスは、修道制の理想像を使徒の働き4章32-35節から把握した。同、55頁

⁸ 同、46頁

⁹ 西欧において修道院が普及した理由は、1古代末期において貴族層が禁欲的・

ベネディクトゥス（480–550年）は西欧修道院制度の創設者であった。彼は、ベネディクトゥス会修道院規則を作成した。それは、「貞潔、清貧、従順」を目標とし、「祈り、働け」に基づく共同生活からなる修道院であった。12の小さな修道院があり、各修道院は、12名以内の修道士から構成され、それぞれ一人の長の指導のもとにおかれた。529年にはモンテ・カッシノ山に移り住み、そこに修道院が創設された¹⁰。

7世紀には、教皇グレゴリウス1世によって派遣された修道士により、イングランドに修道院が創設されていった。

東方では、柱頭行者シメオン（?–549年）が不眠行者として活動したが、8世紀に聖像画論争で東西教会が対立するに至った。9世紀には、聖霊発出（フィリオクエ）問題で、東西教会が対立した。この頃、東方ではストゥディオス修道院が設立し、禁欲主義で清貧を求め規律ある修道生活を行った。ストゥディオス修道院は、バシレイオスの修道規則を導入して、労働を重んじ、清貧・貞潔を堅く守ることを目標にした。

西方では、910年にクリュニー修道会が設立した。これは、ベネディクトゥス精神に還る運動であり、修道院改革を断行した。具体的には、聖職者の生活改善、縁故者起用の排斥、聖職者の結婚禁止、聖職売買禁止、修道院付属学校設立等を内容とするものであった。クリュニー修道会は、ローマ教皇直属であり、多くの修道院を統括し、修道院長の任命権を有していた。以後200年の間に西洋に1500の従属修道院を建設した。規律の遵守、祈りの重視、そして集団で活動する団体的精神が、クリュニー修道会の最大の特徴であった¹¹。だが、中世末期には、規律の弛緩と墮落のために批判されて、衰退し

修道的理想に対する肯定的態度が広く在ったこと、2司教と修道院の密接な結びつき、3書期の修道制の理解、であると、フランクは論じている。同、60–62頁

¹⁰ ベネディクトゥスは、修道院だけでなく宣教、教育、学問、産業など、あらゆる事業に従事して発展させる修道士を生み出し、「キリスト教文明の光で、かつて暗闇を逐斥し、平和の賜を輝かせた彼は、今もなおヨーロッパに君臨し、彼のとりつぎによって文化は発達し、ますます拡大していく」と教皇パウロ6世の回勅に述べられた。朝倉文市『修道院にみるヨーロッパの心』16頁

¹¹ クリュニー修道会は、ベネディクトゥスの戒律を守ったが、修道士の生活をみ

た。

同時期の東欧では、988年にキエフ公国のウラディーミル侯がギリシャ正教に改宗して国教とした。10世紀末には、アトス山修道院が設立した。11世紀には、キエフにストゥディオス方式のペチェルスキー修道院が設立された。いずれも共住型ではなくて、修道士個人の禁欲的修道生活を重視する隠修制であった。

1054年、東西教会は、相互に破門状を公布し、ローマカトリック教会とギリシャ正教会に完全に分裂した。1096年から1270年にかけて十字軍運動が展開した。特に1204年の第4回十字軍はコンスタンティノポリスを攻撃して、東西教会は敵対関係に陥った。

その後、修道院は、ローマカトリック教会において発展する。

Ⅲ. ローマカトリック教会の修道院

ローマカトリック教会の修道院は、歴史的に見て、以下の4段階の進展が見られる¹²。第1段階はアントニウスに始まる隠修士的独居生活、第2段階はパコーミオスの村落的共同生活、第3段階はベネディクトゥスの共同生活による隠世修道院生活、そして第4段階は12世紀以来の使徒的修道生活である。

この修道院の進展区分に従うと、中世後期から第4段階が始まると考えられる。

A 中世後期

十字軍運動とレコンキスタが展開した時期には、騎士修道会が設立された。ヨハネ騎士団、テンプル騎士団、ドイツ騎士団などがそれである。これらは、騎士道と修道制を融合しようとするものであった。いずれも、十字軍が終結

たしたのは、典礼であった。「典礼は戒律で求められている度合いを遙かに超えて、修道院での一日を律するものになった」（フランク『修道院の歴史』75頁）。

¹² 『カトリック大事典Ⅲ』（研究社、2002年）153-155頁を参照。

し、レコンキスタが完成すると消滅した。

1084年に、フランスのグルノーブル郊外に創設された修道院がカルトゥジア会である。これは、古代の隠修士を模範とし、ベネディクトゥスの精神に基づく共住制の修道院である¹³。

1098年には、モレームのロベール（1028-1111年）によりシトー修道院がフランスの森林の中に設立された。彼らは当時のクリュニー修道会が墮落していると非難して、ベネディクトゥス精神にもどり、世間から離れて自分自身の手で労働し、質素な白い衣服を着用して共同で苦行生活をした¹⁴。ベルナー（1090-1153年）の主張により、シトー修道院は12世紀末には西洋各地に広がり、その数は500を越えた。

1155年にパレスチナのカルメル山で始められた清貧と独居による禁欲生活を起源とするのがカルメル会である。会の主な目的は、孤独と隠遁、神との神秘的合一、観想、祈りによる奉仕である。

13世紀には、托鉢修道会として、1209年にフランシスコ会、1215年にクララ会、1216年にドミニコ会が設立した。これらは、修道する場所への結びつきではなくて、人的団体として世俗の中であって、様々な活動をした。

フランシスコ会は、フランチェスコ（1181-1226年）により設立され、「イエスにならう」のを求めた。具体的には、福音の遵守、所有権の放棄、金銭受納の禁止、托鉢生活、説教と労働、聖職者への敬意が目標とされた。正式名称は、「小さき兄弟の会」であり、民衆の間に支持を広げた¹⁵。13世紀末に

¹³ 「彼らの独居の伝統が時代の求める個人主義的傾向にもうまく対応していた」（マーセル『キリスト教のスピリチュアリティ』、119頁）。

¹⁴ シトー修道院は、クリュニー修道会がベネディクトゥスの戒律よりも典礼を重視していることを非難して、戒律遵守を主張した。「共同生活を強調したことから、シトー会は、隠修士生活が高く評価された当時であって、共住制の救済者となった」（フランク、85頁）。

¹⁵ フランチェスコが1223年に書いた規則には、小さき兄弟たちの規則と生活とは「従順と無私と貞潔とに生きつつ、我らの主イエス・キリストの聖なる福音を遵守することである」とある（フランク、109頁）。フランチェスコ会は、都市における司牧活動、北アフリカと中近東のイスラームへの宣教活動、大学での教育活動にも従事した。

は、6万人を越えた。

クララ会は、フランシスコ会の第二会であり、クララ（1193–1253年）がフランチェスコとともに創設した。女子修道院であり、福音的清貧の生活、托鉢、祈りと奉仕に生きた。

ドミニコ会は、ドミニクス（1170–1221年）により創立された。「観想し、観想の実りを他に伝える」という精神に基づき、キリストを預言的に観想する生活と、説教などの活動生活の二面から成る。「説教者兄弟会」として説教や神学研究を重視する。

B 近代以後

1517年に始まる宗教改革は、カトリック教会の修道院にとり危機的状況となった。プロテスタントが万民祭司の理念の下、修道院を否定したからである。

しかし、1534年、イグナティウス・デ・ロヨラ（1491–1556年）は、ザビエル（1506–1552年）ら数人とイエズス会を創設した。1540年には教皇から認可を受けて、対抗宗教改革の先鋒として活動した¹⁶。「より大いなる神の栄光のために」を目標にして、宣教活動と青少年の教育事業に従事した。柔軟性と合理性をもって、カトリック教会を改革していった。

16世紀には、対抗宗教改革の中、信徒信心会系統の修道院としてのテアティノー会、ウルスラ会、オラトリオ会、また、原始会則遵守系統の修道院としての女子カルメル会、カプチン会が創設された。

18世紀以後、カトリック教会の修道院は、再び攻撃される。フランス革命が反キリスト教、反カトリック教会の運動として展開し、修道院を廃止しようとしたからである。フランスにおいて教会は旧体制における支配者であった。人間理性に価値を置く理神論を行動原理としたフランス革命は、カトリック教会を攻撃した。修道院はそのために壊滅的打撃を受けた。

¹⁶ 1540年に教皇パウルス3世から承認を受けた時の共同体の目標は「十字架の旗のもとで神のために争い、主にのみ、また地上におけるその代理人である教皇様に、奉仕すること」であった（フランク、145頁）。

20世紀になって、修道院は整理統合され、安定した時期を迎えている。

IV. ギリシャ正教の修道院

すでに述べたストゥディオス修道院を創設したテオドロス（759–826年）は、聖像破壊運動に強く反対した。彼は、バシレイオスの修道規則を採用して、禁欲主義、清貧、規律を遵守徹底した。彼の修道院は、10世紀にアトス山に創設された修道院にも影響を与え、アトス修道院は、東方教会の修道院制度の中心になった。

A ロシアにおける修道院の発展

10世紀に修道院はスラヴ地方にも広がっていった。

11世紀に、アントニー（983–1073年）とフェオドーシー（1008–1074年）により、キエフにペチェルスキー修道院が創設された。この二人は、「ロシアの修道院の父」と称せられている。両者ともキエフの洞窟で修道生活に入り、1057年に修道規則を導入した。これはストゥディオス方式の規則であり、完全に世俗から分離された場における隠修的修道生活を標榜するものであった。

13世紀に始まるモンゴル支配下において、修道院の多くは破壊されたが、14世紀になると復活した。その契機になったのが、1392年に創設されたトロイツェ・セルギエフ修道院であった。

ラドネジのセルギー（1314–1392年）は、両親の死後、兄とともにモスクワに近いラドネジの森に入り修道生活を開始した。弟子が増え、1340年に修道院を開いた。これがトロイツェ・セルギエフ修道院であり、ストゥディオス方式の規則を守り、以後、ロシア正教会の総本山になった。セルギーは、その後も弟子たちと40の修道院を創設した。

14世紀以後、北東ロシアの僻地において新たな都市が建設された。これらの多くは、修道院が形成したものであった¹⁷。

¹⁷ この時期に創設された修道院については、拙著『ロシア・キリスト教史』67–78頁を参照。

修道士は、世俗を離れて静かな禁欲生活を送れる場を希求した。そのため僻地に修道院が建設された。修道士のあとには農民や商人が修道院の周りに移住した。その結果、都市が建設された。修道院は、諸侯より土地所有権、修道院寮内の農民裁判権、免税などの特権を得た。

1347年から1353年に書けて、ロシアに黒死病が流行し、人口の4分の1が犠牲になった。黒死病の流行は、僻地型修道院の建設を促した。さらに、土俗信仰より精神性の高いキリスト教信仰への希求を高め、修道院の発展を結果とした。

1240年から1340年にかけて30の修道院が、1340年から1440年にかけて、実に150の修道院が建設された。

1588年には、モスクワに総主教が置かれ、ロシアが今日に至るまでギリシャ正教会の指導者的位置を占めることになった。

B ヘシカスムと修道院

ロシアにおける修道院の発展は、ヘシカスムの普及と密接に関連している。

ヘシカスムは、静寂主義とも訳される修道思想である。福音書において、キリストが変容した記事がある。「そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。」(マタイ福音書17:2)この光を実見することができる、というのがヘシカスムの教えである。実見するには、「主イエス・キリスト、神の子、罪人なる我を憐れみ給え」というイエスの祈りを絶えず唱えることとされた。

ヘシカスムは、ギリシャ教父であるニュッサのグレゴリウス(330-394年)やエジプトのマカリウスにも遡る思想である。

グレゴリオス・パラマス(1296-1359年)は、コンスタンティノポリスの貴族の家庭に生まれ、若くして修道生活に入った。1318年にアトス山修道院で修行した時にヘシカスムを学んだ。イエスの祈りを集中して何度も唱えれば、神の恵みにより、神の光を実見し、神との合一に至るというものである。

一方、イタリアのバルラム(1290-1350年)は、コンスタンティノポリス大学教授であり、ヘシカスムを批判した。神の本質は不可知であるから、

人間は神の光を実見することはできない、と彼は主張した。これに対して、パラマスは、三位一体の神の本質は見ることはできないが、神の恵みの働き(エネルギー)として万物を照らす神の光は、実見可能であると反論した。

1341に開催されたコンスタンティノポリス教会会議において、パラマスの主張が認められて、ヘシカスムは正当化された。

ロシアにおいては、ラドネジのセルギーがヘシカスムを信奉していたので、ロシア全土の修道院にヘシカスムは広がっていった。

世俗から隔絶した自然の中で、禁欲的な隠修的生活を行って、神の光を実見しようとする。このようにして、ロシアにおける修道院の発展に、ヘシカスムの普及が強く関係していたと考えられる¹⁸。

結論：整理と課題

ローマカトリック教会とギリシャ正教会の修道院の歴史と思想を概観した結論として、共通点と相違点から両者を比較すると以下ようになる。

共通点は、基本的な修道思想にある。すなわち、両者とも、パコーミウスやバシレイオスの修道思想に起源がある。そして、清貧・貞潔・従順を掲げ、祈り働けという禁欲的生活の中で修行する。

相違点は、第一に修行の仕方にある。ローマカトリック教会では、主に都市において、共住型、すなわち共同体的生活により修道生活が行われた。他方、ギリシャ正教会においては、共住型よりはむしろ隠修型修道院が支配的であった。さらに、主な修道院は都市よりも辺境に建設された。

第二に、修道の目的に違いがある。カトリック教会では、キリストにならう者になり、世俗に対して慈善活動と福音宣教をすることが、修道の目的である。これに対して、ギリシャ正教会では世俗への活動は基本的にはなく、ヘシカスムに見られるような個人の神秘的体験、神との合一等をひたすら求

¹⁸ 久松英二は「静寂主義は、孤独と静寂のうちに神観想を追求するという性格上、隠修士的修道環境の中で生まれ、受け継がれてきた」と述べる(豊田浩志編『キリスト教修道制』、109頁)。

めることに目的がある。

第三に、靈性は修道院の中で保持されてきたが、その保持の仕方にも違いがある。それは、修道院と教会、国家との関係が影響していると考えられる。すなわち、ローマカトリック教会の修道院は、教会を改革する運動として創設されてきた。修道士が墮落した教会を刷新しようと自由に修道会を結成して修道院を創設する。その後、ローマ教皇の認可を得るという形で成立した。ギリシャ正教会では、教会と国家権力とは互いに同等な権威を有し、それをもって国家を支えるというビザンティンハーモニー（皇帝教皇制）が機能していた。修道院は教会に対立する位置にはなく、教会の部分となっていた。従って、修道院が教会を批判して教会を改革することは、まずなかった。

ところで、靈性の担い手に関しては、ローマカトリック教会もギリシャ正教会も修道士を含む聖職者だと考えられる。しかし、靈性の中心は、両者とも聖礼典にあるが、ローマカトリック教会ではミサにおける聖体であり、ギリシャ正教会では礼拝とイコンだと考えられよう。

プロテスタント教会の靈性の担い手は、万民祭司に基づくので信徒にあると考えられる。それでは、プロテスタント教会の靈性の中心はどこにあるのであろうか。聖礼典であろうか。それとも、神の言葉である聖書であろうか、あるいは、聖書の説き明かしである説教であろうか。今後の課題としたい。

(愛知教育大学教授、聖書キリスト教会協力牧師)